文化薫道

～文化の風が吹くまち ちくしの～

問い合わせ先／文化財課（歴史博物館内）☎（922）1911

山家宿代官の明治維新

―其の三十一―

慶応3（1867）年春、長崎街道・山家宿の代官石松元周（もとかね）は、かねて父の元啓（もとあき）が望んでいた、朝倉の宝珠山権現への参詣を思い立ちます。

福岡城下の薬研町（現在の福岡市中央区天神2丁目付近）に住む父母、元周夫妻ら一行6人で4月18日の朝、山家を出立しました。初日は恵蘇八幡宮の斉明天皇陵、圓清寺、普門院に詣で、二日目は目的の岩屋権現に参詣。三日目は筑後川で鵜飼いを楽しみ、四日目は大雨のなか甘木まで戻って一宿。次の日の22日に帰宅しました。元啓は役人を引退した後、歌人として悠々自適の生活を送っていました。元周は絵の心得があり、旅の思い出を「宝珠山紀行」という親子合作の旅日記に残しています。元啓が随所で心に浮かんだままを歌い、元周がその情景を描いています。

文久3（1863）年、8月18日、京都で起きた政変による尊攘派公家たちの都落ちが端緒となり、禁門の変―下関戦争―長州征討などの大きな政治事件が相次ぎました。慶応元（1865）年2月、月形洗蔵ら筑前勤王党の働きかけで、長州にいた五卿（三条実美、三条西季知、東久世通禧、四条隆謌、壬生基修）が太宰府へ移りました。翌年、幕府は目付役の小林甚六郎らを派遣し、二日市を拠点に五卿の奪回を図ったので、筑紫野一帯は緊迫した情勢となりました。

山家宿でも、治安を目的に松崎道と原田道とに分かれていた道路を長崎街道に一本化し、臨時の関番所を設けるなど慌ただしい空気に包まれていたため、代官がのんびりと旅に出る状況にはなかったはずです。

では、元周にとって旅の真意とは何だったのでしょうか？

元周が描いた「宝珠山紀行」の挿絵

旅帰りの翌月、元周は「五卿は保養と称して近村を馬で徘徊し、時には兎狩りなど催している」ことを郡奉行に訴え出ます。しかし、郡奉行の見解は「山家関番所の職務怠慢」でした。同年8月、元周は「去冬の薪仕組（統制）の不正、平日心宜しからず」という理由で代官を罷免され、減給十石という謹慎処分を受けたのです。

その4年後、福岡藩は「県」となり、藩主の黒田家は東京へと居を移しました。元周は藩祖を祭る光雲（てるも）神社の再建に余生を捧げるのでした。

発行／筑紫野市　編集／秘書広報課
〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西一丁目1番1号 ☎092(923)1111 FAX092(923)5391
印刷／久野印刷株式会社
発行部数／41,600部